

第3版の序

— To be a BilioPancreatic Endoscopy Master —

ご存じの方もおられると思うが医学書でベストセラーといわれる販売数は業界では4千部以上といわれている。喜ばしいことに皆様のおかげで2008年にJDDWで初版が発刊されてからJDDW2017までの9年間の発売総数はそれを優に超えさせていただいている。実際、日本の至るところでお会いする初学者から中級者（消化管専門も含めて）の内視鏡医の先生方に「先生の本、私ももってますよ」と言ってもらい、つくづく編集者としてこの本を出してよかったと感じている（もちろんこれまでに執筆していただいた多くの先生方のおかげであるが）。

この度第3版を出版させていただくこととなった。約10年目の改訂ということで、当初“東京5大学勉強会”関係の先生方と東京医科大学の私以下中堅の先生が中心であった執筆者を、今回東京医科大学の私以下中堅の先生中心の執筆陣とさせていただいた。その心は“一本筋の通った手技解説本”をつくりたいということであった。この類の手技の成書は、多施設の多執筆者により書かれているものがほとんどであり、じつは“統一性がない”という問題があった。そのため、今回は私自身も新たに追加執筆させていただき、病理も含めて東京医科大学を中心に、入澤篤志先生、安田一朗先生、瀧沼朗生先生、そして良沢昭銘先生という定番の胆膵内視鏡Masterに執筆陣に入っていただいた。

内容についてもカニュレーション等の基本は変わることはないが、治療手技においては、バルーン小腸内視鏡や超音波内視鏡ガイド下膵周囲液体貯留ドレナージや胆管ドレナージなど現在保険収載されている新しい手技が追加されており、多くの初学者から中級者の先生方、そしてコメディカルの皆様には満足していただける手技解説本と自負している。またコラムには、若手の先生方をEncourageすべく、米国で医師免許を取得し、それぞれのユニットで活躍している日本人内視鏡医に海外に目を向けることの重要性を説いていただいた。

現在、多くの領域でArtificial Intelligence (AI) の時代が到来している。残念ながら医療も確実にAIに置き換わっていくであろう。実際、そのComputer-aided Medicineは消化管領域では内視鏡が対象病変をしっかりと描出できれば0.2秒で正診確率まで表示されたAI診断ができるようになっていく。では胆膵領域はどうであろう。カニュレーションをはじめとするERCP関連治療や超音波内視鏡手技、特に治療をAIができるのは相当先であり、まだまだ人の手、いわゆるHuman-aided Therapyが必要なことはいうまでもない。したがって本書がこれまでも、そしてこれからも（当分の間）胆膵領域の内視鏡関連手技において、多くの初学者の指南本となり続けると確信している。

最後に、たいへんお忙しいなか執筆、ビデオ作製をしていただいた各執筆者および執筆協力者に厚く御礼を申し上げる。

2017年9月

糸井隆夫